長野県阿智村と大鹿村を訪ねる　　2007.7.4～7

三泊四日昼神温泉湯治のたび

7 月 4 日～7 日の三泊四日で昼神温泉へ出かけた。先回の下呂温泉での療養がとても良く、足の痛みを忘れさせてくれたので再度温泉へ行くことにしたのだ。いろいろ調べたところ数日の宿泊でお値打ちなコースが見つかった。昼神温泉の阿智村村営「鶴巻荘」では、連泊コースと湯治コースがありとてもお値打ちな料金だった。
左足首骨折の友の青木君を誘って三泊四日の湯治旅となったしだい。

1　湯治と歴史散策

下呂温泉などは、その泉質から療養を目的とした湯治客も多いと思うのだが、そのような宿泊プランはない。そこで下呂温泉の泉質に近いといわれる昼神温泉を調べたら、村営の宿泊施設に連泊プランと湯治プランを見つけたのだ。しかも料金は三泊で 18.700 円(2 名 1 室)、湯治プランは 7 泊で 34.000 円とあった。
これならと友の青木君を誘った、彼も即 OK で早速申し込んだ。7 月 4 日～7 日の湯治小旅行のため、近辺の歴史散策も兼ねようと調べてみた。そして昼神に宿泊することから、昼間は以前から考えていた大鹿村へ足を伸ばすのと、昼神温泉地元の阿智村の名所旧跡を見て回ることにした.....

湯治と小旅行のたび予定

4 日　曇り　　15.30 到着予定なので温泉三昧
5 日　曇り　　飯田から松川を経て大鹿村へ
　　中央構造線博物館、ろくべん館、小渋温泉「赤石荘の湯」
　　時間があればヒマラヤの青いケシの花見学
6 日　曇り　　阿智村史跡
　　武田信玄終焉の地「長岳寺」、信濃比叡、駒止めの桜
7 日　時々雨　帰る

肝心の温泉は 1 日 5 回入浴を予定。

2　落ち着いた宿「鶴巻荘」

13.00 に刈谷市をスタートして湾岸高速から東海環状道へ進む、中央道の恵那峡 SA で休憩し高速を出る前の御坂 PA で一旦止まり、宿の位置を確か

めて高速に戻った。恵那山トンネルを出るとすぐに園原 IC を降りる。
宿は国道 153 から昼神温泉郷に入ったすぐの所にあり、迷うことはなかった。玄関は旅館らしいたたずまいではなく、ちょっと以外な感じであった。でも玄関の宿泊者名簿には「知多郡　浪崎様」と大きな文字が見えたので安心した。名簿からは 7 組の宿泊者が予定されていた。
　15.30 到着フロントは若い女性で名札から笹真弓さんと分かった、少しふくよかな笑顔がとても若々しかった。まだ 10 代かな?　やはり客の応対は女性に限る、いくら丁寧な応対をされても男性とは比べ物にならない、女性というだけでソフトな雰囲気がある。
部屋は一日自由にお使いください、布団は自分で敷いてくださいと、渡されたキーは 201 号室、部屋への案内はない。あっさりしていて良い、廊下の突き当たりから 2 階に上がった最初の部屋である。特に飾り気があるわけでもない極普通の部屋ではあるが、これで十分である。

①　純和風、畳風呂の宿

　昼神温泉もビルタイプの大きなホテルが多いが、ここは瓦屋根の和風建築で正面からは平屋建てのように見える。でも宿泊棟は 2 階建てである。
玄関前は大きな広場になっている、実はここが駐車場にもなっているが、その広場を囲んで瓦屋根付きの塀のような建物が L 字型に並んでいる。じつはこれ雨天の時の朝市広場なのだ。
　鶴巻荘の一番の売りは畳を敷いたお風呂である。玄関にも日帰り入浴者を誘うために「お座敷風呂」と名うっている。
部屋に落ち着くとすぐにお風呂へ行く、浴室は 6 畳ふた間まではないが 1.5 倍くらいの広さだ。そして、名前の通り洗い場は畳敷きである。歩いても滑ることがなく安心できる、きっとお年寄りには喜ばれること請け合いである。もっともかくいう私たちもお年よりなのだろう。お湯は少しヌルットした感じで肌にかけると、つるつる感がまさにこれぞ温泉と思わせてくれる。
湯船の隅には飲料用と記された温泉が流れている、お湯に浸かるだけでなく飲むことでも温泉の効能を高めることができるのだ。そこには飲む時間帯とゆっくり時間をかけて飲むようにと、飲み方も説明されていた。具体的には朝 6.00～8.00 がベスト、午後なら夕食前の空腹時で夕食後はいけない。
でも不思議なことに温泉の成分表が掲示してないのだ、翌日利用した隣にある日帰り温泉施設の「ゆったりーな昼神」には掲示されていた。

②　夕食の献立も、朝のバイキングも GOOD

　三泊四日の食事はどんなものか? 料金が料金だから期待はしていなかったが、これが以外に GOO なのだ。地のもの、家庭的な献立やちょっと珍しい和え物とか私好みのものばかりだった。友も同じで、温泉場の湯治でこん

なにおいしいものが食べられるとは嬉しい限りだ。
ちなみに三日間の夕食は

一日目　鯉の煮付け、陶板焼き、刺身、天婦羅、ソーメン、粕もみ、きゃらぶき

二日目　アユの塩焼き、山掛け、ギョウザ鍋、かぼちゃのあんかけ、豚肉の梅肉揚げ、卵豆腐、なすの味噌、メロン

三日目　エビフライ、うなぎの蒲焼、牛のタタキ、マスのマリネ、酢のもの、しめじの胡麻和え、オレンジ

いろいろなご馳走、しかも多すぎず、少なすぎず適量で満足なものだった。朝食は和風のバイキングで、キャベツ、トマト、ハム、ウインナ、玉子焼き海苔、ごぼうのキンピラ、スパゲッティー、蒲鉾、生卵、大根おろし、しらす、梅干、それに数種類の漬物などが並んでおり、ふだんよりとても豪華な食事であったことは間違いない。

③　温泉の入浴回数

予定した温泉の入浴回数は目標をクリアーして,合計 15 回も温泉にはいった。入浴時間を示すと実績は次のようになる。

4 日　15.30　17.30　21.00

5 日　6.00　8.30　15.40　17.30　21.00

6 日　6.00　8.30　13.00　15.00　21.00

7 日　6.00　8.30

しかも 5 日、6 日、7 日の朝にはコップ一杯の温泉を飲んだ。

④　効能は……

一番肝心なことは、それでどぅだったか!!
私は二日目の 5 日の昼頃までは、左足が張っているような感じで痛かったのだが、その張りがとれて普通に歩くことができるようになった。問題はこれがいつまで続くかだ。
友の青木君はというと、足が痛くて散歩は出来なかったのだが、二日目と三日目はあちこち見学したが、歩けてしまったという。間違いなく温泉の効能

は確かだと実感した。

⑤　朝市

6 日と 7 日は宿の前に並ぶ朝市を見てまわりました。中でも目立ったのは獅子頭を売っている「清子さん」、花の苗を売っている「順子さん」で二人ともなかなかの美人です。若い頃はさぞかし.....と思わせる顔立ち。
早速友は獅子頭に関心があるのか人間に興味があったのか、清子さんに話しかけていました。後で聞くとどのようにして造るのか、造り方を聞いていたとか。そして、美人に弱いのか帰りにはとうとう買っていました。
私は順子さんの扱う花の中でアジサイが目に留まりました、それはガクアジサイのようでした。でも聞いてみるとそうではなく、アジサイの原種で紅アジサイというのです。美しい色と形が気に入ったので一株買いました。他の店は野菜とかいろいろな漬物が多かったようです。

3　二日目は大鹿村を訪ねる

朝は 6.00 に温泉に入る、旅の朝のんびりとお湯に入るのはとても贅沢な感じがする。お湯から出てほてった身体が心地よい、しばらく休むと朝食である。7.00 に食堂へ行く、バイキングなので好きなものを取って部屋の番号札のある席につく。遊んでいる時の朝ごはんはとてもうまい。
茶碗に一杯のご飯と、器に盛ってきたごちそうは残らず食べた。そのあと新聞に目を通して部屋に戻る。8.15 からの連続テレビドラマ「どんど晴れ」を二人そろって見るのだ。ドラマも毎日見ていると面白くなるもので、家では朝食を食べながら、新聞を見ながらこの番組を妻と一緒に見ている。
8..30 になると再度温泉に入る、これが今回の目的なのでおろそかにしてはいけない。入浴は肩まで湯に入るのではなく、腰まで入る程度にしている。俗に言う半身浴で、この方がゆっくり入っておれて良い。

大鹿村の案内板

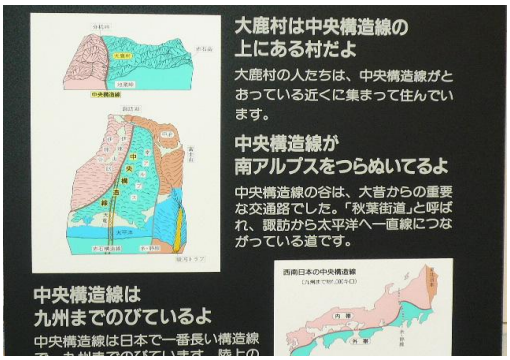
博物館から見た小学校

朝の行事が終り 9.00 に大鹿村へ向け出発した。園原 IC は名古屋方面しか出入りできない構造になっているため、飯田方面へ入ることは出来ず 153 号を飯田、松川まで走る。

① 中央構造線博物館の見学

事前に準備した地図とナビを使い松川の「上新井」交差点を右折して大鹿村へ向かう。天竜川を渡るとその後は、川沿いの崖の下をくねくねと走る狭い道が続く。所々にトンネルもありそのうえダンプカーが多く走っている、道の狭い所でダンプカーが来たらどうしようと心配になる。そんな道も大鹿村の集落付近に入ると、普通の立派な道路になる。
立派な村役場を過ぎた川沿いの広場で休憩してホットタイムにした。両側を山に囲まれた狭い谷に川と村が肩を寄せ合っている所だ。大鹿村は東西 15km、南北 25km が地形.地質の観測が出来る博物館と言われているのだ。それらを分かりやすく展示しているのがこの博物館である。そもそも中央構造線というのを知らなかった、糸魚川から静岡県へ延びている大地溝帯は覚えていたが。

岩石の並ぶ中央構造線博物館



館内の説明板

この中央構造線は関東から長野、静岡を通って渥美半島から紀伊半島、四国を横切り大分から熊本を横ぎっている。この線から北は片麻岩で、南は変成岩から出来ている。そんな事がどうして分かったのか、館員の方の説明で分かった。明治政府が招いたドイツ人地質学者「エドモンド ナウマン博士」が調べ上げたものだという。彼は後に東京大学初の地質学教授になったという。しかし、それにしてもよくこんなに調べたものと感心する。当方は石にはそんなに興味はないし、地球はプレートの移動によって永い年月を経て今の姿があると言われてもピンとこないのだ。

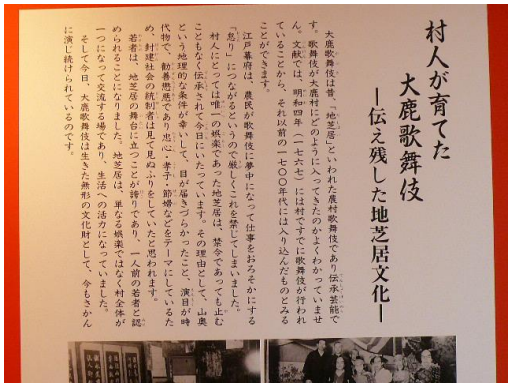
② 郷土資料館「ろくべん館」と大鹿歌舞伎

隣にあるのが「ろくべん館」で、山村の暮らしぶりを伝える山林と農業の

道具が展示されている。そして、大鹿といえば歌舞伎である。
いまから 400 年前、京の都で生まれた歌舞伎が、どのようにして大鹿村に伝えられたのかは不明であるという。江戸時代の古文書には、当時幕府の厳重な禁止令のなかで旅役者の手ほどきで、各集落の神社の前宮としての舞台で演じられたと記されている。

明治 4 年に村人によって歌舞伎が上演されたという記録もあり、地芝居は農村の最大の娯楽として、幕末から近代にかけて全国各地で行われていた。大鹿歌舞伎はその原型を今日まで残している珍しいものだ。村にはかって 13 箇所に舞台が建てられて、今も四つの舞台が残って歌舞伎が演じられている。この大鹿村へは大スターであった、市川団十郎や松井須磨子が訪れているそぅだ。そして、平成 8 年に国選択無形民族文化財となった。
公演活動も活発に行われ、オーストリア、ドイツへの海外公演や大阪国立文楽劇場公演など各地で上演をしている。

村内では春(5 月 3 日)、秋(10 月第 3 日曜日)に定期公演として、年 2 回演じられている。永い伝統に裏打ちされた歌舞伎も、展示の写真や説明を見ても、その良さが分からないのが、はがゆくとても残念である。
そして、館名の「ろくべん」とは昔の弁当箱のことである。木箱を 6 段重ねて持ち運べるようになっていて、それぞれにご馳走を入れるのだ。金持ちは見栄を張って 6 段ではなく、8 段、10 段挙句には 13 段のろくべんがあったという。確か子供の頃には、それらしい弁当箱は我が家にもあり使ったと記憶している。


村人が育てた
大鹿歌舞伎
―伝え残した地芝居文化―

大鹿歌舞伎は昔、「地芝居」といわれた農村歌舞伎であり伝承芸能です。歌舞伎が大鹿村にどのようにへってきたのかよくわかっていません。文献では、明和四年（一七六七）には村ですでに歌舞伎が行われていることから、それ以前の一七〇年代には入り込んだものどろることができます。

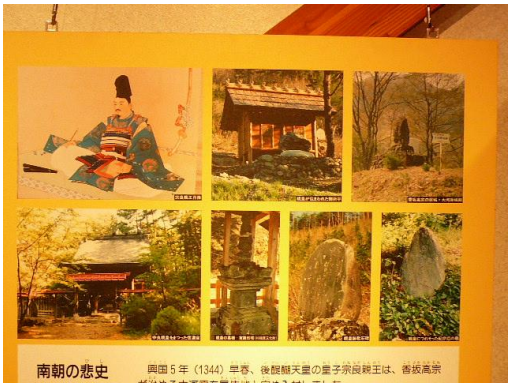
江戸幕府は、農民が歌舞伎に夢中になって仕事をおろそかにする「怠り」につながるというので厳しくこれを禁じてしまいました。

村人にとっては唯一の娯楽であった地芝居は、禁令であっても止むこともなく伝承されて今日にいたっています。その理由として、山奥という地理的な条件が幸いして、目が届きづらかったこと、演目が時代物で、勧善懲悪であり忠心・孝子・節婦などをテーマにしていたため、封建社会の統制者は見て見ぬふりをしていたと思われます。

若者は、地芝居の舞台に立つことが誇りであり、一人前の若者と認められることになりました。地芝居は、単なる娯楽ではなく村全体が一つになって交流する場であり、生活への活力になっていました。

そして今日、大鹿歌舞伎は生きた無形の文化財として、今もさかんに演じ続けられているのです。

歌舞伎の歴史を説明



宗良親王と関連する史跡

③　南北朝時代の歴史の里

大鹿村の地図を見ていたら、「香坂高宗の墓」という文字が眼に入った。知らない人なので調べてみたら、南北朝時代の大鹿村大河原の主で後醍醐天皇の第八王子である宗良親王を迎えた人と分かった。しかし、そんな歴史があるとは知らず、大鹿村を訪ねて初めて知ったことがらである。

宗良親王とは後醍醐天皇の第八皇子で、生母は歌道の大御所藤原定家の子孫に当たる藤原為子。親王 20 歳の時比叡山延暦寺の天台宗座主となり、興国 4 年(1343)の冬 34 歳の時に、香坂高宗に迎えられて大河原城に入る。これは東国の南朝方の勢力拡大のため信濃の国へ入っていたからで、以来 30 有余年、高宗らの忠誠によって大河原を南朝の拠点として活躍するも、事ならずしてこの地で没せられたという。

親王は南北朝時代の第一の歌人としても有名で、戦の陣頭歌として詠まれた「君がため 世のため 何か惜しからむ 捨てて甲斐ある命なりせば」、そして、大河原の風景を詠まれた「いずかたも 山の端近き柴の戸は 月みる空やすくなかるらむ」が知られている。この宗長親王については、東浦の石浜にある「帝塚」が親王にゆかりの者の墓と伝えられている。

④ 眺望抜群「赤石荘の露天風呂」

大鹿村行きには温泉を楽しむこともあった。塩分の多いことで有名な鹿塩温泉を考えていたのだが、調べてみると予約した方がよいとなっていた。もう一つの小渋温泉は日帰り入浴 OK としてあり、且つ露天風呂からは南アルプスが一望できるとしてあった。

そのため小渋温泉へ行くことにした、博物館から川沿いに上流へ 3km ほど上る。ここも狭い道をくねくねと走っていく、途中に立派なお堂があったので見学する。長野県最古の木造建築で、国の重要文化財に指定されている「福徳寺」の本堂だった。

重文の福徳寺

赤石荘のパンフレット

近くには香坂高宗の墓、宗良親王を祀る信濃宮、大河原城跡などの史跡が点在している。そこから少し走って 11.40 小渋温泉の赤石荘に到着した。ところが玄関に準備中の看板がでているではないか、だめでもともとと受付で温泉に入りたいと申し出ると、受付の女性は奥に入っていき女将さんらしき人が出てきて「お休みですが、今日はお客さんかあり準備ができているので

いいですよ」と言ってくれた。
やれやれである、わざわざ鹿塩温泉をやめて赤石荘にきたのに、温泉に入れないではがっかりしてしまう。これでは食事は無理のようなので、さっそくお風呂に向かう。更衣室から一歩風呂場に入ると、目の前に谷間が広がり南アルプスが眺められる、すばらしい眺望である。まさに絶景、絶景!!
湯の温度も高からず低からず、40 分ほども景色を眺めながら足をさすりながら、いろいろな話に時を忘れていた。
　赤石荘を出て村の中心まで戻り、食事どころを探して走っていると秋葉路という看板が目に入った。お店が何件もあるわけではないので、えり好みをせず 12.40 その店に入った。きれいなお姉さんが一人店番に居た、何故か凱旋門の大きなポスターがはってあり、それに写っているモデルさんに似た美人だ。「ひょっとしてあのモデルはお姉さん?」と声をかけると、笑いながら首を振った。そのしぐさが田舎娘みたいで新鮮な感じがした。
　メニューはそば、うどんとあるが、「ざるそば」とはしてないので聞くと掛けそばという。冷たいそばはだめ? と聞くと「いいですよ」と言って準備してくれた。しばらくしたら、われわれくらいの年かっこうの夫婦が入ってきて同じ事を言って、同じように応えていた。
事前に調べたヒマラヤの青いケシの花の見学は、すでに時季が少し遅いのと 1 時間近くかかる細い山道を、くねくね行くというのであきらめることにした。

4 阿智村の史跡を訪ねる

　明治 8 年に向関村、大鹿倉村、備中原村、河内村、栗矢村が合併して伍和村(ごかむら)が誕生し 80 年間続いたが、昭和 31 年の合併により阿智村になった。大鹿村から宿への帰り、阿智村役場近くにある「長岳寺」に寄った。R153 を左折して村役場への道を進む、狭い道が田舎であることを物語るかのようである。斜面を下って U ターンして進むと長岳寺はあった。

①　武田信玄ゆかりの長岳寺

　長岳寺は天台宗の古い寺で　、武田信玄を火葬にしたと言われる由緒ある寺です。武田信玄は甲斐、信濃、駿河の全てと上野(馬県)の西半分、遠江、三河、美濃、飛騨、越中の一部を手中に納め、元亀三年(1572)、武田全軍に北条の援軍を加えた大軍勢で西上。
三方ケ原で徳川. 織田連合軍を粉砕するも、病に倒れて甲斐へ一時帰還。しかし、翌天正元年に行軍途中信州駒場(現阿智村)にて、53 歳の生涯を閉じたと言われています。
　長岳寺は信玄の義理の兄弟が住職をしており、遺骸はこの寺に運び込まれ

た。しかし、影武者をたて信玄は生きていることにしました。その後、長岳寺を守っていた馬場美濃守、原備前、高坂弾正らの武将により荼毘に付し、お骨にしてこっそり甲斐へ持ち帰ったという。

長岳寺本堂

武田信玄供養塔前にて

その火葬塚より火葬灰を長岳寺境内に移し、信玄公の供養塔として 13 重の塔が建立された。昭和 49 年 4 月信玄公 400 年祭のときである。
そんな長岳寺の境内は狭いものの緑が多く、その中に 13 重の塔をはじめ新田次郎の句碑、芭蕉の句碑などいくつかの碑がたくさん見られた。NHK の番組で紹介されたことなどの掲示もあった。今はテレビの時代であり、テレビにでれば一躍有名になること間違いなし。でも私は今回初めて信玄がここで亡くなったことを知った。よい勉強になったしだい。

② 信濃比叡と月見堂

6 日は 9.30 に宿を出て月見堂へ向かった。宿でもらった地図を見ながら行ったのだが、最初に間違えてしまったのに気がつかずにどんどん奥へ進み、園原のスキー場で聞くつもりで寄ってみるも、車はたくさん駐車しているのに人が居ない。困ってしまい一度戻ろうとしたら、一人の女性が出てきたので早速道を尋ねた。結果、駒つなぎの桜方面へ行けば良く、インターを過ぎて最初の分岐を右折すればよいことが分かった。
缶コーヒーを飲んで小休止してから来た道を戻り、坂道を進んでいくと信濃比叡の大きな石碑が現われた。ここは信濃比叡根本中堂で、名前は平成 12 年に総本山比叡山延暦寺より「信濃比叡」の呼称が許可された。平成 17 年に本堂を建立し、比叡山延暦寺根本中堂より「不滅の法灯」が分灯されています。この寺は美濃と信濃を行き来する、神坂峠(1576m)の信濃側にあります。この峠越えは濃霧がかかりやすく、雷も多く発生し、冬には積雪も多い地域です。したがって今から 1300 年以上も前はこの峠を越えることは容易なことではなかったのです。多くの人がこの難所で命をおとしているのです。

これを見かねた天台宗の開祖最澄は、信濃側に広丞院を美濃側に広済院の二つの布施屋を建てたのです。おかげで旅人の難儀がへり多くの人の命が救われたといいます。この広丞院は現在の月見堂といわれています。
これを見かねた天台宗の開祖最澄は、信濃側に広丞院を美濃側に広済院の二つの布施屋を建てたのです。おかげで旅人の難儀がへり多くの人の命が救われたといいます。この広丞院は現在の月見堂といわれています。
　真新しい根本中道の本堂では、坊さんにぜひ上がってお参りをと勧められたので、木の香も新しい本堂に上がってみた。すると天井は正方形の枠が連なる形になっており、その一枚一枚に花の絵が描かれていた。とても素晴らしいものだと感じた。こんな天井を確か大浜のお寺さんで見た記憶がある。

最澄上人像と根本中堂

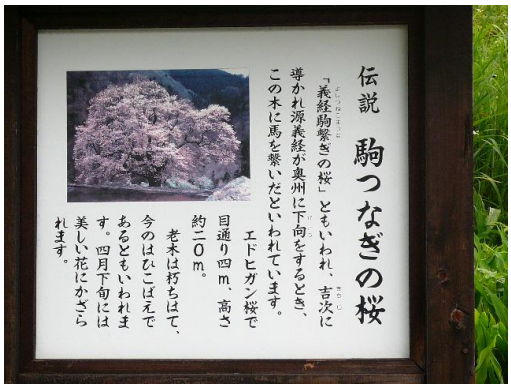
月見堂

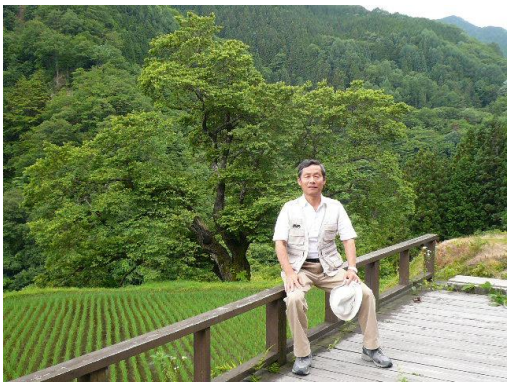
お参りを済ませ根本中道を後にして下って行くと、月見堂に出ました。そこは道路が右にカーブするところで桜の木が茂って、鐘楼の周りには桔梗の花が咲いてなんとも云えぬ風情を感じました。隣の建物には投句箱が設置されていました、これを見て俳句をたしなむ友に投句を勧めました。
せっかくのチャンスなので私も一句ひねりました……「月見堂　苔むす垣にききょう咲く」

③　義経伝説「駒つなぎの桜」

　月見堂から 1km ほど奥に入った所に、桜の木があるというので細い道を進めて行きました。右側は山で左側は水田が続く細い道です、こんな所にまで米作りの努力がされているのです。ほどなくすると説明の看板が見えてきました。車を停める場所は整備されていません、車一台が通れる道幅しかない道路です、どうしようと見回すとその先に丁度車一台が止められる所があり助かりました。
　桜の木は水田の土手にしっかり根を下ろしていました、大きな立派な桜です。山の緑と水田の苗の緑に挟まれ、緑の葉っぱをいっぱいつけて、思い切

り枝を広げていました。春に花が咲いたときは、また一段と艶やかな姿になることでしょう。この桜は源義経が奥州に下る時、馬をつないだといわれています。エドヒガン桜で目通り 4m、高さ 20m もあります。
美しい水田と緑の桜を眺め、ここでも一句ひねりました……「深山や 青田に映える 桜かな」。




駒つなぎの桜

④「 熊谷元一」写真童画館

宿の隣に、地元出身の童画家熊谷元一の作品を展示する館がある。農村の原風景をとどめた写真、子供たちを中心に描いた農村風景など、昔の田舎の風景は私たちの心を揺さぶるものがあります。
ちらっと覗いただけですが、一枚一枚の絵には懐かしくも温かい気持ちが伝わってきます。こんな展示が各地にあっても良いなと思いました。

今回の湯治の旅は、湯治はもちろん近隣の村々をたずねて、多くのことを学びました。腰痛がなければこられなかったかもしれず、人生は何事も意気に感じて頑張りたいものです。